２０１７（平成２９）年度
法務研究科　法務専攻（法科大学院）Ｄ日程　入学試験問題

「　小　論　文　」

〈６０分〉
（注意：解答はすべて解答用紙に記入すること。）

以下の文章を読んで問いに答えよ。

問題1
筆者の主張を１０行以内に要約せよ。

問題2
体調が悪く、病院に行くべきか自宅で静養するべきかを検討する場合を例にとり、筆者の主張に基づけばどのようなことが言えるのか述べよ。

地球温暖化は、決して何もコストがないようなものではない。その多くの問題を見る中で、それが確実に暑さによる死者を増やすことは見た。海面上昇ももたらすし、もっと強いハリケーンや多くの洪水を引き起こすこともあり得る。マラリアや飢餓や貧困も増やすだろう。こういうメッセージを伝えるのはだいじなことだ。

同じく、地球温暖化を何とかするのもコストなしとはいかない。燃料を石炭からガスや再生可能エネルギーに変えるのは、それなりにお金がかかる。輸送を制限したら、経済の効率は下がる。熱いシャワーや航空旅行や自動車を控えたら、あなたの生活も前ほどよいものではなくなる。さらに寒さから救われる人も減ってしまうし、水ストレス人口も増えてしまうし、マラリアを防止できるだけの富を持てる人も減ってしまう。こういうメッセージだって伝えるのはだいじだ。

地球温暖化をどうにかすると、便益もある一方で費用もかかる。こうした費用と便益をどうやってきちんと計るかという対話をみんながしなきゃいけないのは明らかだ。ところがいまのパニック状況では、気候変動があまりにすさまじく圧倒的に描かれているから、費用の話をすること自体が許し難い人でなしのように思われてしまう。いまの議論の展開だと、とにかく便益のことだけ考えて、費用は考えないようにするしかないらしい。

でも費用を考えなくても、支払わずにすませるわけにはいかない。優先順位を議論しなくても、結局は何かしらの順位付けは行われることになる。得られる便益を受け入れるにしても、ずっと多くのものが得られた可能性はある。

史上最もお金のかかる地球政策プログラムかもしれないものに手を出すなら、それが資源の使い方としてよいものか、確かめたほうがいいんじゃないだろうか。

フレッド・ピアスは著書『最後の世代』で、３００ページにわたって雄弁に最悪ケースの結果を述べ、それがすべて、強い炭素排出削減を訴えかける長い懇願として構築されている。１５ページの補遺の最後の４ページで、かれは手短に（規模もきちんと説明せず影響も述べられていない）何かをするのは安上がりではない（ざっと８兆ドル）けれど、長期的にはこれはごくわずかな一時的支出でしかないのだ、と述べる。気候変動と戦ってもぼくたちがいきなり貧乏農場にたたき込まれるようなことはない、という点でフレッドは圧倒的に正しいけれど、それを言うならその他の公共政策で考えられる変化だってそんなことはない（というのもＧＤＰの１～５％を使うくらいで

みんな破産はしないからだ）。それでもみんな、希少なリソースはなるべく上手に使いたいだろう。全体として、フレッドの論旨は史上で最もお高い公共投資プログラムの分析としては驚くほどお手軽だ。」

（ビョルン・ロンボルグ著「地球と一緒に頭も冷やせ」より抜粋）

入試日程　D日程　　題科目名　小論文

出題趣旨

問題１

論理的に文章を積み重ねていく能力を問う問題である。出題文の構成がシンプルなので、文章の順序に従って、段落をとばさずに、内容を順次要約していけば、要約は自然に出来上がると思われる。

地球温暖化によるコストを述べ（第１段落）、地球温暖化防止によるコストを述べ（第２段落）、地球温暖化を防止すると便益も費用も発生することを述べ、地球温暖化によるコストがあまりにも大きくとらえられ、防止のためのコストが考えられていないと現状分析を行い（第３段落）、地球温暖化についても費用対効果を考えたうえで、資源の使い途としての優先順位を考えるべきであるという結論に至る（第４・第５段落）という流れとなる。

その中で、出題文のキイワード（コスト、便益、費用、優先順位等）を効果的に活用していれば加点要素となる。

なお、最後の段落は筆者の主張を裏付ける具体例であって、新たな主張を含むものではないので、取り上げていなくても減点にはならず、取り上げる場合もごく簡単に触れるのが望ましい。

問題２

病院に行くことによって得られる便益と自宅で静養することによる便益を比較衡量する能力を見る問題である。

双方の立場から、広い視野に立って説得力のある便益を多数述べているかが第一のポイントとなり、双方の便益の比較衡量が論理的になされているかが第二のポイントとなる。

以　上